

台湾少年工 神奈川とのつながり



台湾の親日感情は台湾少年工を通じて、神奈川とつながっている。75年間の歴史を振り返り、日台の友情を考える。

連載 | 追う | 地域発 | 語る | 問う | 論説 ■ 特報

台湾少年工75年の友情 ①

「この7年間で3人が亡くなった。友達は少なくなっていくけれど、友情は変わらない。体に気を付けて行けるまで、頑張っていきたいと思います。ではそのままの姿勢で、黙とう」

9月18日、台湾の最大都市・台北市内のレストラン。80年代後半から90年代前半までの台湾人の男性10人が集まった。司会を務めた貞藤松さん(80)による流ちょうな日本語のあいさつの後、黙とうをささげた。

太平洋戦争中、大和市と座間市に存在した旧日本海軍の戦闘機工場「高座海軍工廠」で工員として働いた元少年軍「台湾少年工」は、8,400人を超える10代の少年たちが海を渡った。その同窓組織「台湾高座会」の台北分会(安泰)の定例会だ。

「朝のめそ汁本ばかり、屋のおかずは魚のしっぽ、ソメの突撃ものすて、冬はラムの出撃だ」。全員で合唱する会歌の歌詞には、戦時中、高座時代の思い出が躍るが、歌声は明るく大きい。

屋敷をとりながら、カラオケで旧日本軍の軍歌を歌い、草紙に花を映かした。戦後75年が経過したが、毎月1度、旧交を温めている。

台湾全土に広がる会全体では毎年、数十人規模で大和市中にある慰霊碑を訪ね、工廠関係者を中心とした2つの住民団体「高座日台交流の会」(大和市)、「高座日台の会」(伊勢原市)と関係を結んだ交流が続いている。

最盛期には4千人近くが所属し、「世界一の親日」と評され

地元住民と困難超えて

台湾で「最大の親日団体」と呼ばれる高座会。しかし、会員の平均年齢は90歳目前となり、台湾人男性の平均寿命76.8歳を超えた。「存命の会員は7,000〜8,000人ほどではないが、会の案内を出しても返事が届かないことが増えている。

20日、第二の故郷 神奈川へ

「われわれの第二の故郷である大和市を訪問した後、20日には綾瀬市長を表彰訪問し、午後からは大和市の歓迎大会に出席します」。理事長の李雪晴さん(92)の穏やかな日本語に参加者がうなづく。

少年工の第一陣8,000人が横濱港に到着したのは1943年5月だった。今年で75年となったのを記念し、大和市で今月20日、歓迎大会が開かれる。二つの交流団体が中心となり、海上自衛隊横須賀音楽隊のコンサートなどが行われる。元少年工20人と付き添いの家族ら100人に参加し、地元の友人と再会するのだ。

一人当たりの渡航費は日本円で20万円ほど。付き添いの家族が4人いれば、100万円。大卒の初任給が10万円ほどといわれる台湾、大きな負担だ。

最後の訪日は80周年の前日にしたがったが、そのとき、元親日日本に行ける人がどれだけいるだろうかと李さん。75年を全うして最後の訪日と位置づけている。

呉さんは「心臓病で私は参加できない。しかし、生きてさえいれば、医療の進歩でまた日本に行けることができるでしょう」と残念そうに話した。

李さんは「歓迎大会、日本の皆さんにお会いできることを楽しみにしています。ますます日台の関係を強くして、未来へ付き合っていきたいと思います」と話した。

台湾少年工は米軍の空襲の主眼目標となった軍用機工場に配属されたため、何度も生命の危険に直面した。終戦までに約60人が亡くなった。

戦争に巻き込んだ日本人を恨みに思っても仕方がないはずだが、なぜ反対に日本を第二の故郷と懐かしむのか。

そこにあったのが、地元住民との間に生まれた心温まる交流だった。少年工に食料や冬の防寒着を分け与え、困難な時代をともに生き延びた。

兄弟少年工だった縁で、少年工の苦難もある台湾の元大学教授で歴史学者の林嘉福さん(72)は「地元の日本人も食料や物資不足に苦しんでいた。それでも東日本大震災直後、人口約2300万人の台湾から200億円を超える義援金が届くなど物心両面の支援が寄せられた。元少年工たちも率先して募金集めに奔走した。原発事故の風評が色濃くあつた震災翌年の2012年でさえ、146万人もの観光客が訪日した。震災から日本人が立ち直ることができたきっかけの一つは、台湾から寄せられた温かい支援だった。

台湾人の親日感情の背景にあるものは何か。指摘されるのが、日本統治時代の教育とインフラへの感謝だ。「例えば、戦後に造られた建物はすぐ朽ちるのに、日本時代の建物や頭巾は今も残っている」と南部の高座市に住む元少年工の男性。鉄道やダム、水路など日本時代に整備されたインフラが戦後の経済発展を支えてきた。

そして、日本統治時代に教育を受けた「日本統治時代」と呼ばれる人々の存在だ。戦後、台湾の学校では反日教育が行われた時期もあったが、子や孫に「日本人ははじめだつた」「日本時代は治安が良く、糧をかける必要がなかった」などを伝えた。「口グミ」の力は大きい。



訪日を前に台北市内のレストランに集まった元少年工の男性たち

日本語時代の代表格である台湾少年工を通じて、親日感情の一端はこの神奈川、地につなげられている。75年間の歴史を振り返り、日台の友情を考える。

(山元 信)

2018年[平成30年]

10月18日[木]

赤口

連載 | 追う | 地域発 | 語る | 問う

論説 ■ 特報

台湾少年工75年の友情 ②

「高雄の港で両親が『こんな小さな子もまたお前地へ送るなんて』と泣きながら見送った。元台湾少年工の男性(89)は涙を流し、75年前を振り返った。

太平洋戦争中の1943年から44年にかけて、日本統治下の台湾から10代の少年たち約8400人が直線と千早離れた旧日本海軍の戦艦工廠「高座海軍工廠(座間、大和市)を自

指し、海を渡った。工廠に隣接する厚木基地は首都・東京を守る空の要塞。局地戦開始「雷電」の生産を担った。当時の小学校、やその高専科を出たばかり、12歳前後の少年たちにはむづかしい命を賭けた大冒険だった。

日本海軍は守勢に回り、制海権を奪われかけていた。船は米軍の潜水艦を避けるため、大きく迂回した。多くが国民学校(当時の小学校)やその高専科を出たばかり、12歳前後の少年たちにはむづかしい命を賭けた大冒険だった。

徴兵で日本本土の男性が軍隊にとられた結果、重工業場でさえ労働力が不足。海軍は日本統治下で日本語教育が行われていた台湾の少年に期待をかけたのだ。

少年工の募集には好条件が付いた。当時の台湾も日本同様、生活が貧しく、多くの優秀な少年たちが経済的な理由で進学を諦めていた。軍国教育で軍人が憧れた時代、工廠の工場は重労働だった。そして、給料と衣食住だけでなく、工廠では上

志願の選抜8400人 渡海

級学校と同等の教育や英語といった授業もある。

国民学校の高等科を卒業した人たちが在学中と卒業後の卒業資格がもらえる。さらに、旧制中学校(現在の高校以上)の卒業生であれば高等工業学校の卒業資格を得て、航空機技術師になれる。働きながら学び、身を立てる。少年たちの心は燃え上がった。

さらに、学校の先生たちも背中を押した。ある元少年工の男性は、「昔の先生は今よりもはるかに尊敬され、権威もあった」

と話す。放課後、自宅に優秀な児童を集めて勉強を教えたり、身銭を切って上級学校への学費を面したりする先生がいたから。その先生に勧められたら、「嫌です」とは言えなかった。

「(台湾でも徴兵が始まり)いざれ兵隊に召される。その前に軍属となる」と考える人もいた。単純に大都会・東京を見たいという「憧れ」のような理由の秋もあった。

志願の理由は十人十色であったが、少年たちはほぞつて応募し、選抜試験に挑んだ。

昨年1月にじくくなった元少年工の野澤生(きん)享年88は戦後日本に残り、日本国籍を取得し、大和市に住み続けた。生前、「当時の校長は成績がとんでも優秀じゃないとなれなかったんだ」と自身が校長に選ばれた時の感激を語っていた。

「ところが、工廠に来てみると校長教師がなまなまういて罵いたよと喜びに笑っていた。学校によっては30倍近い倍率もあった。親の心、子知らず。日本行きを拒否された。自分も親の承諾印を押すケースが相次いだ。だから、海軍工場に選ばれたことは優秀だった証であり、誇りである。

実は「志願」は台湾少年工の歴史で大切なキーワードとなっている。現代の基準で見れば、10代前半の少年を動かせることはさまざまな問題がある。しかも危険と隣り合わせの重労働場ならはなほなほだ。

「志願」は台湾少年工の歴史で大切なキーワードとなっている。現代の基準で見れば、10代前半の少年を動かせることはさまざまな問題がある。しかも危険と隣り合わせの重労働場ならはなほなほだ。

「優秀な証」強制連行否定

ところが、現代の基準を75年前に当てはめ、「植民地の台湾の少年たちが戦争中、日本行きを強制された」などと言われると、元少年工たちの多くが怒り出す。

異さんもその一人だった。2002年に発行された大和市史「歴史編 近現代」には台湾少年工について、戦後の交流や成績優秀者が応募し、試験を受けたことに触れながらも、数千人を超える少年が大和に連行されて来た「選択の余地がなく、大勢の少年が応募した」と記された。

病床で「事情を知らない後世の人が中史を読めば、台湾少年工は強制連行されて来た」と

「志願」は台湾少年工の歴史で大切なキーワードとなっている。現代の基準で見れば、10代前半の少年を動かせることはさまざまな問題がある。しかも危険と隣り合わせの重労働場ならはなほなほだ。



朝、職場に向かって寮を出る台湾少年工

思ってもよまう。大空外だ。憤っていた。

台湾を自国の領土と主張する中華人民共和國(中国)の首都・北京。日中戦争の端緒となった盧溝橋のほとりに、中国人抗日戦争記念館は建つ。その一角に戦時中、航空機工場へ働く台湾少年工を写した写真が展示されていた。添えられていたのは中国語と英語で「日本に労働を強制された」との趣旨の説明文。

この話を聞いた別の元少年工は半ばあきれがら言った。「強制されたのなら、日本を第一の敵と恨み、今も毎年、大和に来るはずがないでしょう。そして、こう続けた。「抗議すれば、中国が怒る。中国との間の国際問題をこれ以上、増やしたくない。台湾は危険な瀬戸際にいるのです。」

中国の軍力を含む有形無形の圧力。外交関係を持つ国は17に減った。台中市で2019年に開催される予定だった国際スポーツ大会「東シヤアヌゲームズ」は中国の反対で中止になったという。

ある元少年工は台北市内の自宅でこう語った。「中国の圧力を受けている台湾や東アジアの国々にとって、中国に対抗しようとする日本の存在がどれほど心強いのか、日本の皆さんには分からないでしょう。特に、国防に力を入れる台湾(中国)総理には本当に感謝しています」

かくして、8400人の台湾少年が海を渡り、大和にたどり着いた。

(山元 備)

台湾少年工75年の友情 ③

太平洋戦争中、米軍の潜水艦が敵意する海を渡った台湾の少年は、座間市の高座海軍工廠で働き、大和上市草柳の森で寝泊まりした。当初は高座の工場が本格的に稼働していなかったため彼らの職場は多く、一部は愛知や群馬、広島など全国各地の工場に派遣された。零式戦闘機「ゼロ戦」、夜間戦闘機「月光」、爆撃機「一式陸攻」の生産に携わった。高座に残った少年たちは局地戦闘機「雷電」を造った。

工廠はフル稼働すれば日直数3万人、年間生産6千機という大規模なものだった。工廠で働いていたのは台湾人ばかりではなかった。大和、綾瀬、伊勢原などで生まれ育った地元少年少女もいたし、大学生もいた。後の大作家・三島由紀夫や、「シヤマのトビウオ」で知られる水泳の名選手・古橋広之進も勤労動員された。

三島は後に自伝的小説「仮面の告白」で当時を振り返り、こう記している。「工場を疎開するための大きな横穴壕を、台湾人の少年工たちと一緒で掘るのだった。この十三歳(原又ママ)の小悪魔どもは私にとってこの上ない友だった」

三島 台湾から来た少年たちには寒さがなかった。丹沢の山々から吹いてくる「丹沢おろし」の風のせいで、冬は特に冷たかった。同級生・台湾高座会の同春副理事長(89)は「暖かい台湾では冬服は必要なかった。だから、日本に来た時も誰も持っていないかった。日本人同様の流ちょうな日本語で話す。あ

生命救った「高座の情」

住民ら食料や防寒具譲る

かき、しもやけが罹り、医薬品不足から麻酔なしで手術せざるを得なかった。「麻酔なしの手術。痛くて泣いた。悪い出すと戦後70年たった今でも涙が目に浮かぶ」

そして、鉄条網製の風が吹き荒れていた。重傷である少年工は生活の金が軍隊式だった。小さなミスでもすぐにビンタが飛んだ。「大人が子どもを殴るんだ。痛く後悔しつづけない」

台北市の喫茶店で張来英さん(87)の日本語に激しい感情が交じる。国民学校(当時の小学校)を出て高座に渡った最年少の年代だ。「そして少年同士が向かい合ふ。往復ビンタで聞いたことがある。台湾人同士が殴り合っていた」

戦前の悪化は、海軍が少年たちを拘束した上級学校での勉強を棄つた。動きながら学ぶ。少年たちを募った好条件が失われ、工場の随一の工場となっていく。そして親元を離れた地で数少ない楽しみだった食事もほとんど不足した。

張さんは「大豆の豆が水を温めて炊いて食べていた。3分の2が豚が食べるお豆が少なくて、残りが玄米と振り返る。『おかすは悪いときは、豚が食べる菜の塊。』お豆も出さなかった。イモの葉もた」

食べ盛りの少年には何よりも辛かった。だから、何事もなかった。記述の告白「三島が」これらの食糧(原又ママ)は不倫

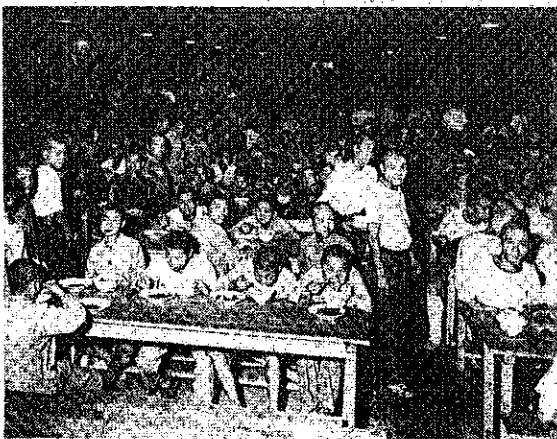
の職に就いていた。すばしい一人が爾来番の目をかすめてさらって来た米と野菜は、たっさり注がれた機械でいためられて炒飯になった。餓軍の味がしつづなこの「馳走を私に持たした」

しかし、元少年工は笑う。「三島さんは知らなかったんだらう。植物油の機械油もあつたんだ。だから、食べるのができたんだ」

交流団体「高座日台交流の会」の会長を務める石川公弘さん(82)元大和市長会議議長は語る。「少年たちは辛さを紛らわせようと(旧日本軍の)軍歌を大声で合唱していた。声変わり前で『奮闘隊』と呼ばれた彼らの歌声が十重、十重と重なって聞いていたのを鮮明に覚えてい

「しかし、石川さん当時、気付かなかつたところがある。戦後、東京から大和に疎開していた日本人の同級生から聞きかぐせんだ。「行進の最後尾の少年たちは泣いていたんだ」

「疎開の子もうちも大和では辛者。地元の子もにいじめられることもあった。故郷を



食堂で食事をとる台湾少年工

この環境下で少年たちを支えたのは地元の住民との付き合いだった。横須賀の工場に派遣されていた台北市の呉慶松さん(89)によると、工廠の食糧のおぼろげな「命の恩人」

食糧が余った飯を分けてくれただけではない。「自宅に抱いて食べさせてくれた白米のご飯は今でも味が忘れられない」と涙ぐむ。洗濯も十分にできない中で、洋服にはシミが卵を産み付けた。普通の洗濯では落とせない。おぼろげな飯で煮粥にされた。同じ職場だった挺身隊の少女は、兄のお古だった綿の入った防寒具とラザリの毛皮の耳当てをくれた。

親切にしてくれたおぼろげな実家から送ってきた砂糖を持って行った。当時、甘いものは非常に貴重だったため、大感謝された。台湾少年工と地元住民は困難な時代を乗り越えて生きてきた。(山元 信之)

神奈川新聞

THE KANAGAWA

2018年[平成30年]

10月20日[土]

友引 | 土用

神奈川新聞

連載 | 追う | 地域発 | 語る | 問う | 論説 ■ 特報

台湾少年工75年の友情

④

「意外と飛行機は早くないんだ。台北市に住む元台湾少年工の張永松さん(87)は73年前を振り返って。仲間と一緒で厚木基地(大和、綾瀬市)で「零戦」や「雷電」などを手で押し

既に関は1945年8月15日、戦争に敗れていて。ところが、厚木航空隊は徹底抗戦を唱え、降参命令にめがかった。反乱軍となった隊員たちは駅頭に立ち、飛行機を飛ばしたりして、国民に徹底抗戦を呼び掛けるドラをまいた。

もちろん、戦争に疲れていていた国民は応じなかった。部隊内からさえ、家族持ちの応集兵はいち早く実家へ帰っていった。皇族も説教に加わり、21日に反乱は収束する。海軍は反乱に参加した将兵を基地から退去させた。

82日には米軍の先遣隊がやってくる。基地には多くの軍用機と武器が残っていた。万一、誰かがこれらを使い、米軍を攻撃したら、処分しようにも、航空隊員の多くが去った後では、労働力が足りない。日本政府も心配する中、改戦処理に加わったのが、張さんと台湾人の元少年工だった。船がなく台湾に帰郷できずに、大和市上草柳の寮で無聊をかこっていたのだ。

空を飛べないままプロペラが外された零戦や雷電を押し、谷底に落とした。自分たちで一生懸命、造ったものだから。とつても気分は憂鬱だったよと張さん。青い空の長き航空機用の機頭砲を人かかりで運んだ。スコップを手に砂利を敷き、米軍の輸送機が着陸する滑走路を整備した。大日本帝国海

軍の「零式」を出した。

国民が日本から中華民国に変わった。敗戦の焼け野原を周らした。張さんの経験が国民となつた。環境の急激な変化で、舞い上がった少年工の一部は倉庫を賑わたり、いじめられた日本人の上司に復讐したりした。文武両道の優秀な少年たちがクレテ、暴走した。多くの元少年工が今でも「日本人に本意に申し訳ない」とを「と謝罪する「眼差し」だ。

それでもすぐに立ち直つた。「このままではいけない」と危機感を抱いた李雪峰さんの(82)台湾高専理事長も旧制中幸

校の卒業生を中心に自治組織をつくり、まごまごした。台湾に戻つたため、日本政府や神奈川県と交渉を重ね、千円の退職金と帰郷するまで毎月50円の小遣いを得るようになった。

45年12月、横濱市の浦賀港で第一陣が客船に乗り込んだ。大きなリノックバックを背負い、意気揚々とした少年たちをよそえた当時のニュース映画が残っている。どの子も足取りは軽しい。一物物の大半が旧海軍の残した荷物だった。でもね、帰りの船の中でほとんど食べやうなんだ。台北市の呉慶松さん(89)は笑いながら、振り返った。

戦後、元少年工の一部から日本政府に賠償を求めようとする声が上がったことがある。ところが、大きな声にはならず、しぼんでしまった。昨年「元

つた元少年工の男性は生前、こう語っていた。「既に退職金は一度ももらっていない。二度、もろつては日本精神に反している」

「立派な中華民国国民になろうとした。一生懸命、北京語も勉強したんだけど」。南部の高雄市の男性は振り返る。ところが、帰郷した少年たちを待たせていた運命は苛烈だった。中国から逃げてきた国民党軍が住民を弾圧。1947年の「二二八事件」では約1万8千人、約2万8千人が殺されたといわれる。

敗戦を受け入れ、平和を謳歌していた日本と対照的に、政府への不満を煽る政治犯となつてしまった。

「日本統治時代の方がはるかに良かった。北京語はめ、家で台湾語と日本語で妻と話すことにした」と男性は語った。別の男性はこう語る。戦争中、台湾人だけ苦勞したなら日本人を恨みに思つかも shouldn't だが、当時が黄、苦勞した」と「特に日本人の若者は国を守るために特攻隊で大勢死んでいった。彼らの苦勞に比べれば、私たちが苦勞は大したことない」。車の根レベルで、日本時代を再評価する動きが生まれている。

ただ、中華民国の旧敵国・日本で軍用機を造っていた元少年工たちは厳しくマウクされた。高専時代を耐えた冒と、地元の人から受けた罵詈雑言、少年工で集まっていた慰問の出場が盛り上がった。生きるよろこぶところもなっていた。

1963年11月、東京五輪を控えた日本。大和市上草柳の善徳寺に慰問団が設立された。戦争末期の45年7月、近くで米軍機の攻撃を受け、6人の台湾少年工が亡くなった。「高専だったら川金次さん(故人)が私財をなげうつた。「無事に帰元に帰すことができず申し訳ない」と、よく悔やんでいたという。

慰問団建設の一報は口コミで台湾に伝わった。元少年工が再び集まろうとかけよった。政治家や企業経営者といった社会をリードする存在に成長していった。流石な元少年工を生かして、台湾に進出した日本企業で働いた人もいる。早川さんの元には出稼ぎなどを利用して、台湾から元少年工が訪ねて来るようになった。国境を越えた往来が生まれた。

時代も動く。経済発展や民主化の進展で、海外出国や集金の規制が徐々に緩和されていった。82年の(元)も切りに各地で同窓組織が発足。87年に戒厳令が終る。88年、全国組織の台湾高専会が発足した。最盛期は約4千人が参加し、台湾最大の親日団体と呼ばれるまでになった。

台湾少年工の音響もある台湾の元大主教、歴代校長の林景淵さん(74)は冷戦時代、「大半の元少年工は日本時代に感謝している。しかし、二二八事件など国民の親日感情がなければ、これほどの親日感情は生まれなかつたでしょう」

工たちは厳しくマウクされた。高専時代を耐えた冒と、地元の人から受けた罵詈雑言、少年工で集まっていた慰問の出場が盛り上がった。生きるよろこぶところもなっていた。

「立派な中華民国国民になろうとした。一生懸命、北京語も勉強したんだけど」。南部の高雄市の男性は振り返る。ところが、帰郷した少年たちを待たせていた運命は苛烈だった。中国から逃げてきた国民党軍が住民を弾圧。1947年の「二二八事件」では約1万8千人、約2万8千人が殺されたといわれる。

敗戦を受け入れ、平和を謳歌していた日本と対照的に、政府への不満を煽る政治犯となつてしまった。

「日本統治時代の方がはるかに良かった。北京語はめ、家で台湾語と日本語で妻と話すことにした」と男性は語った。別の男性はこう語る。戦争中、台湾人だけ苦勞したなら日本人を恨みに思つかも shouldn't だが、当時が黄、苦勞した」と「特に日本人の若者は国を守るために特攻隊で大勢死んでいった。彼らの苦勞に比べれば、私たちが苦勞は大したことない」。車の根レベルで、日本時代を再評価する動きが生まれている。

ただ、中華民国の旧敵国・日本で軍用機を造っていた元少年工たちは厳しくマウクされた。高専時代を耐えた冒と、地元の人から受けた罵詈雑言、少年工で集まっていた慰問の出場が盛り上がった。生きるよろこぶところもなっていた。

帰郷後 高まる 親日感情

校の卒業生を中心に自治組織をつくり、まごまごした。台湾に戻つたため、日本政府や神奈川県と交渉を重ね、千円の退職金と帰郷するまで毎月50円の小遣いを得るようになった。



大和市上草柳の善徳寺にある慰問団を訪れた元台湾少年工や家族ら(2016年5月)

時代も動く。経済発展や民主化の進展で、海外出国や集金の規制が徐々に緩和されていった。82年の(元)も切りに各地で同窓組織が発足。87年に戒厳令が終る。88年、全国組織の台湾高専会が発足した。最盛期は約4千人が参加し、台湾最大の親日団体と呼ばれるまでになった。

台湾少年工の音響もある台湾の元大主教、歴代校長の林景淵さん(74)は冷戦時代、「大半の元少年工は日本時代に感謝している。しかし、二二八事件など国民の親日感情がなければ、これほどの親日感情は生まれなかつたでしょう」

(山元 信之)

元少年工の思い、次代が継承



台湾少年工の高齢化が進む。良好な日台関係を若い世代に引き継ごうと、双方が継承活動に取り組んでいる。

連載 | 追う | 地域発 | 語る | 問う |

台湾少年工75年の友情 ⑤

20日前、丹波の山々を一望する鹿間市栗原の芦沢公園の一角で石碑の除幕式が行われた。太平洋戦争中、地下には敵機を生産する旧日本海軍の高原海軍工廠があった。米軍機の攻撃を受けるため、地下壕を掘り、地上の施設を移していた。台湾からやって来た少年工たちもここで働いていた。現在も地下壕跡が残っている。

「北に對し、年の初めの祈りなり、心の祖国に、栄えあれかし」

真新しい石碑に刻まれた歌は、13年前に亡くなった元少年工の伊勢原山さん(享年76)が日本への思いを託したものだ。台湾に帰郷後も工場経営の傍ら、日本語で趣味の短歌を毎日作っていた。

作家の故・阿川弘之さん(87)の歌を知り、涙があふれて言葉が出なかつたという。その感激を「無謀の戦争もつて、彼らを見過ごした日本を『心の祖国』だなんて思つてくれる老人の大勢ある国が、世界中の何処にあるか」と、「文芸春秋」2000年3月号のエッセイで記している。

そして、その隣には伊勢原高等女学校(現在の県立伊勢原高等学校)を卒業後、工廠で機織職員として勤務した佐野たけ子さん(81)が伊勢原市の歌「朝文にひたすら祈るは、台湾の、平和なると、友の身のこと」が並ぶ。工廠関係者らによる交流団体「高麗日台の会」の会長として、長年、元少年工の訪日を受け入れてきた。

今年には台湾少年工の第一陣800人が横浜に着いてから75年

子や孫継承つなぐ歴史

に当たる平均年齢は90歳超。節目を記念し、「最後の訪日」として元少年工20人と家族や友人ら約100人が18日に来日した。

石碑の建立は日台親善に尽力した功績を後世に残そうと、阿川さん(87)が中心となり、川公弘会長(89)が中心となり企画した。除幕式には一行と地元住民ら約400人が参加した。午後には大和町で開かれた歓迎大会にも約600人が、伊勢原の妻の林福盛さん(82)は「本道につれたい」と喜んだ。

鹿間市は一行の訪日に合わせて、少年工と地元の案内板を設置したほか、外から地下壕が見学できるように入り口の安全対策を施した。

石碑に刻む日本への思い

大和と伊勢原の二つの交流団体は毎年、元少年工の同意組織「台湾高麗会」と連携した相互訪問を続けてきた。「20年以上、これだけ多くの人が日台間の往來を続けているのはあまり例がない」と日台関係に詳しい専門家。

少年工の第一陣到着から60周年の1993年6月に元少年工と家族ら約1400人が来日した。歓迎大会は日本側も約1800人が出席し、盛況を呈した。

97年には高麗会が日本円で2千万円を投じ、大和町と栗原の

「ふれあいの森」に台湾風のあずまや「台湾亭」を建設。市に寄贈した。45年7月に米軍の攻撃で少年工6人が亡くなった場所だ。

60周年の2003年には約700人が、70周年の13年には約250人が来日した。節目の年以外にも、これまで毎年、数十人が親善と交流のために大和を訪れている。日本側も二つの交流団体が毎年、数十人規模で訪台し、高麗会の年次総会に出席してきた。

高麗会の李雲峰理事長(82)は13年に、同春副理事長(89)も17年に日本政府からそれぞれ叙勲を受けた。海外にある一つの団体の正副理事長が相次いで授与されるケースは非常に珍しいという。親日感情の醸成に大きく貢献した高麗会、日本政府の感謝の表れだ。

ただ、高齢化で年々、相互訪問の参加者は減っている。台湾

少年工約8400人のうち、高麗会の会員は17ク時に約4千人を誇った。現在は、7000人8000人ほど。毎年秋に開いていた定期総会も昨年は行わなかった。

アジアの平和は自由と民主主義という同じ価値観を持つ台湾の友好が不可欠。草の根の交流が醸成することで友好が低下しないか(何副理事長)という懸念があるだけに、危機感はない。

だが、その力を入れたのが若い世代への継承だ。8400人もいただけに台湾少年工の子や孫の人数は多い。政治家や企業経営者、医師、大学教授など、社会をリードする存在も少なくない。

昨年、子も孫の世代を中心とした青年部を立ち上げた。青年部といっても「元少年工の90歳代には『お母さん』という代は幅広い。今回来日した約100人のうち、半数以上が戦後



石碑の除幕式に参加した元台湾少年工の男性と家族ら
—20日、鹿間市栗原の芦沢公園

生まれだ。最年少は16歳に当たる1歳2カ月の男児だった。青年部の一人、何副理事長の「台湾の元国会議員の何敬華さん(60)は『日台の絆をさらに強くしていきたい』と意気軒高だ。李理事長は『少年工は同じ金の飯を食った戦友だ。このつながりを若い世代に理解してもらうのはなかなか難しい』と苦笑するが、これで、日本との交流が途切れることはない」とうれしそうだ。

日本側でも世代交代の動きは進んでいる。佐野さんの母校・伊勢原高校の女子バレーボール部は4年前から毎年、台湾に遠征し、地元の高校生と練習するようになった。佐野さん(81)は副理事長が間を取り持った。

同校の広瀬邦彦校長(56)は「台湾の子もまた家族旅行で伊勢原に遊びに来られた。いずれはスポーツだけでなく多方面に交流を広げたい」と意気込む。伊勢原市議会でも高麗会との交流に感謝し、「日台友好の会」親善議員連盟が発足、台湾との交流を模索している。

元少年工の呉春生さん(86)は戦後も大和町に住み続け、元少年工の受け入れ役として、日本側との折衝などを担当した。日本人と結婚。子も2人、孫4人、ひ孫1人に恵まれた。日本国籍を再取得し、昨年1月、88歳で亡くなった。

世界一とも言われる台湾の親日感情が醸成された背景には、元少年工の温かい思いと並進の歴史があり、住民同士の草の根の交流があった。長男の呉春生さん(86)はこう語る。「父の世代は私たちよりも遙かに厳しい環境を生き抜いてきた。良好な日台関係を築くべく、これからも歴史を後世に語り継いでいきたい」

(山元 信之) 川かわり